

花の旅

庄野英二



花の旅

庄野英二



人文書院

庄野英二（しょうの えいじ）
1915年山口県生。関西学院大学卒業。現在、
帝塚山学院大学学長・文学部教授。『星の牧
場』で日本児童文学者協会賞，サンケイ児童
出版文化賞，野間児童文芸賞を，『雲の中の
にじ』でNHK児童文学奨励賞を，『ロッテ
ルダムの灯』で日本エッセイスト・クラブ賞
を，『アルファベット群島』で赤い鳥賞受賞。

花の旅

著者 庄野英二

昭和五十三年三月二十日印刷
昭和五十三年三月三十日発行

発行者 渡辺睦久

発行所 人文書院
京都市下京区仏光寺通高倉西
振替京都二二三 電話五二 三九

印刷 河北印刷株式会社
製本 坂井製本所

定価 一三〇〇円

© Eiji Shōno, 1978
Printed in Japan

0095-000071-3266

目次

東欧 花の旅 …… 5

スリランカ紀行 …… 33

江南の旅 …… 85

キューバ紀行 …… 139

あとがき

庄野英二著作目録

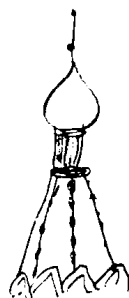
花の旅

庄野英二紀行集

装画・カット
庄野英二

東
欧

花
の
旅



四月二十六日。十一時、羽田着。今回は二十六人の団体旅行である。

東京在住の娘が送りにくる。昨夜、大洞・西塚氏が送別の宴をはってくれ、酒を飲み過ぎ、のどが乾いて仕方が無い。

十一時半、チェックイン。待合室で免税のオールドバーを一本買う。

十二時半、アエロフロート機搭乗。通路をはさんで三席ずつ、とても狭い、暑くて暑くて汗がふきだしてとまらない。

十三時半、やっと離陸。ベルト着用のサインがなかなか消えない。雪の中部山岳地帯をこえて新潟から日本海に出る。佐渡ヶ島が見える。

十五時頃、第一回目の食事が出る。ミネラルウォーターを貰って、オールドバーを割って

飲む。私の右側の上田さんは、前の席の林さんと一緒にナポレオンを開け私も御馳走になる。いつの間にかシベリアの上を飛んでいる。雪の山ばかりが果てしなく続いている。

文庫本を読む。酒を飲んでも、本を読んでも昼寝が出来ない。俳句を作ろうと思うが、アルコールが入っていて出来ない。

十七時頃、ジュースとアイスクリームが配られてくる。シベリアの中部以西は平地帯になっ
ていてもう雪は無い。森林と土がモザイクのように入り混っている。

大きくうねって白く結氷した河が見える。左隣席の以前シベリアに抑留されていた中川氏は、ドン河だろうと云う。

日本とモスクワの時差六時間、太陽を追って飛んでいるので、いつ迄たっても陽が暮れない。

二十時頃、第二回目の食事が出る。大きな柔らかいビフテキがついている。これは日本製に違いない。オールドパーをミネラルで割って飲む。

二十三日、降下姿勢に入る。森林と黄色い耕地、湖が見える。

二十三日三十分（日本時間）着陸。機外に出ると寒い風が快い。みどりの帽子の兵士、男女の労働者、ロシア人特有の服装と人のよさそうな顔つきをしている。

入国手続き、能率悪く手間どる。制服の兵士が、パスポートと照合して何回もじろっと顔を見る。

やっと荷物を受けとり、バスで市内に向かう。

湖に沿った道路で、前回見た記憶がない。パステルカラーの白樺の若葉が地平線まで続く。牧草畑の新芽が美しい。柳が枝一面に柳絮をぶらさげているが、それが花のように見える。イズバ模様の装飾のある古い丸木組の農家があり、主人や妻、娘が庭の花の手入れをしている。

歩道に沿って、パンジーや赤いチューリップの花壇がある。

市内に入っても、土曜の夕方のせいかな通りがすくない。

ゴリキー街を通り、クレムリンの裏側、無名戦士の墓の前を通り、ポリシヨイ劇場の近くのメトロポールホテルに着く。

バーでウオトカを飲み、午前一時半、第二回目の夕食をとる。モスクワ入りの記念にロシアコニャックを飲む。時差六時間、時計の針をもどして午後八時風呂に入り床に就く。

ドン河が大きくうねり結氷す

二十七日（日）。

六時起床。窓の外に、赤い星のついたクレムリンの尖塔や赤旗が、裏の家の屋根ごしに見える。

十時、バスで市内見物。最初に赤の広場へ行く。朝からメーデーの予行（スポーツ選手の行進）があつたらしい。軍用大型トラックが大きな飾りつけをのせて、クレムリンの壁に沿つて何台も並んでいる。グム百貨店の窓も、すっかり大きな板がはりつけられてデコレーションの用意をしている。

軍隊のトラックが、メーデーの準備で何台もつめかけてきている。兵隊の顔がみんな稚い。市内を一巡し、モスクワ大学前の展望台から市内を眺める。造花売りの人のよい婆さんが造花を配ってくれる。

モスクワ大学の裏正面の庭にはレンギョウが満開であつた。リンデンの新芽の蕾がうす赤く桜のようである。

昼食はグルジア料理のレストラン。メニュー、赤いカブの酢漬、シャスイック（串焼肉）、サーモン、ローストビーフ、サラダ、赤、白のワイン、ウオトカ、注文してグルジアコンヤックも飲んだ。

午後はクレムリンを見学することになっていたが、私はもう前に見ているので一人ホテルへ帰ってひるねをする。

目を覚すと、もう夕食の時間であった。あわててホテルのレストランへ行く。

食後、ポリシヨイ劇場へバレエを観に行く。現代風の小品が三つあり、始めの二つは数人によって演じられたが筋が分らない。三つ目のは、スペインの闘牛場を模したステージのモダンダンスであった。

客席は満員であった。アンコールが何回もくりかえされる。紺のスーツを着た如何にも国家公務員といった感じの婦人が舞台の袖から出て行って、おじぎもしないでぶっきらぼうに花束を渡す。花やいだステージのふんいきにそぐわない。

最後のカーテンコールの時、二階機敷からステージに赤いチューリップの花束が投げられて散乱した。

カチューシャのりんごの花はまだつぼみ

チューリップ抱きし少女の脚長く

学寮に毛布干したる日永かな（モスクワ大学）

漆黒のクレムリンの空春の星

アンコール ステージにチュールリップの束放る

二十八日（月）。

五時、モーニングコール。六時、空港へ、風がひんやりする。

チェックインしてから空港のレストランで朝食。八時、ボディチェック、搭乗。九時前に離陸する。

モスクワとブダペスト間の時差二時間。

機中、昼食が出る。二時間半ほどでブダペスト着。

モスクワでは、まだライラックは咲いていなかったが、空港の前の広場にライラックが満開である。

バスが迎えにきている。アンナというガイド嬢が乗っていて可愛らしい日本語を使う。

市内に向かう。モスクワに比べて道幅が狭い、それに沿道が雑然としている。

市内に入ると、ヨーロッパの古いどっしりとした街であった。

ペストの中心街のホテルロイヤル着、フロントもモスクワに比べてはるかに物柔らかである。

十一時より市内観光に出かける。

高いモニュメントのある英雄広場を見てからヴェルバロンテンブルを見学する。高さ九五メートル、長さ八〇メートルもある大きな古い伽藍である。リストはこの寺でオルガンを弾いていたという。

ドナウ河にかけられた美しくさり橋を渡ってブダの丘をのぼっていった。ブダは丘の町で、古城や教会や、中世の古い建物がたくさん残っている。建物それぞれに趣がある。そして

到る所マロニエやライラックの花盛りである。

古寺を二、三訪ねて、古い教会の穴ぐらの中のレストラんで昼食をとる。

名物のペッパールのきいたスウプ、肉、ミートパイ、赤カブ等。

食後、丘の頂きに登りドナ



セント・イシュテパン寺院(ブダペスト)

ウを眺める。水はもう青くはないが、水量豊かで兩岸に古城や寺院の尖塔がひしめき新緑が美しい。

ベストに帰り賑やかな街筋でショッピング。

娘に美しい刺繍の入った民俗衣裳のブラウスを買う。

街角で大の男が花売りをしている。スズラン、チューリップ、スマイレ、ライラック等。

ホテルへ帰り、スナックでビール、こくがあつてうまい。

入浴、休憩し七時よりホテルのレストランで夕食。

バンドがジプシー音楽を奏している。楽器の編成はティンパロンを中心にしてヴァイオリン、ヴィオラ、セロ計八名、ヴァイオリン弾きの太った男が指揮者をかねている。どの奏者もみな巧みである。私たち一行のために、「さくらさくら」や「荒城の月」も演奏する。

林さん持参の福神漬とフキの漬物で、匂いの強い名物のキルシュを二杯飲む。

バンドにチップをやり、ハンガリアンラブソディやチゴイネルワイゼンをリクエストした。

春の雲国境の空飛びこしぬ

春愁やブダの古城の石だたみ

ブダの丘リラ咲く道を幾曲り